

旧樺太での生活・引き揚げ

黒沼 アキ子

私は樺太の長浜郡（のちに大泊郡に所属変更）長浜村生まれ。実家は漁師で津軽の出身だった。当時の樺太には東北出身者が多かったように思う。

樺太は夏が短い。6月になってやっと雪が消えるが、10月になるとまた雪が降る。海に入るのは10日間ぐらいしかなかった。

私は17歳から路線バスの車掌しゃしょうをしていた。バスの運行は、雪が降らない間のせいぜい半年間くらい。運行時間は、朝の7時から夕方の4時まで。片道に半日かかる距離を乗務していた。

樺太は米や果物ができない。代わりに、ハマナスの熟した実をよく食べた。ホッキ貝はいくらでもいて、食べ放題だった。ニシンなどは、海沿いの道路に上ってくるぐらい押し寄せる。

野菜類はあまり採れなかったが、大根などはよく採れた。また、フレップの実を採り、フレップ酒を造ったりした。

家の周りには、ロシア人も住んでいた。ロシア人は米が食べられないので、パンを作る。ロシア人の作るパンは、食べた瞬間はおいしくないが、噛んでいるとうま味が出てくるものだった。

戦争が始まった時は、樺太での生活には特に変化もなかった。長兄は徴兵検査で肋膜炎ろくまくえん（胸膜炎きょうまくえん）と判明して帰された。2番目の兄は軍属だった。

フレップ

常緑の低木で、6月から7月に紅白の釣鐘状の花をつける。秋になると、直径5～8ミリ果実ができ、熟すと赤くなる。コケモモ。フレップは、アイヌ語で「赤い実」を意味し、樺太の代名詞にも使われるほど樺太にはたくさん自生し、秋の野は赤く染まった。実は甘酸っぱく、ワインやジャム、ソーダ、ようかんなどに加工された。

終戦になった後に、ソ連軍が樺太に侵攻してきた。さらに、混乱のどさくさに紛れて、朝鮮人が日本人の子どもを誘拐^{ゆうかい}することが、たびたびあったようだ。

樺太から日本本土に引き揚げるため、長浜から港のある大泊までトラックで行った。港では、一里^り（約4キロ）以上ある^{さんぼし}棧橋が人で埋めつくされていた。車や馬や牛に、タンスや長持などを括^{くく}り付けていたが、最小限の荷物しか持っていけないということで、みんな海に荷物を投げ捨てていた。私はその時^{りんげつ}臨月だったが、棧橋で待っている間、時々^{うぶごえ}産声が聞こえ始めることがあった。待っている間に赤ちゃんが生まれたのだろう。どうするのかと思っていたら、産声が聞こえて少し時間がたってから、ポチャンと音がして、それっきりだった。そういうことが待っている間に3回あった。3日ぐらい船が出ず、棧橋で待っていた。5隻の船が出たが、途中で敵の潜水艦に沈められ、2隻しか函館に着かなかった。

汽車の中でも、連絡船の中でも皆、臨月の自分を気づかってくれることが多かった。8月20日か21日に大泊を出港した。無事に函館に着き、そのまま親の故郷の函館に少しいたが、生活になじめず、樺太で運転手をしていた夫が新潟の出身だったので、新潟へ行った。新潟では朝から晩まで米を山ほど食べた。ただ、魚の味はとても樺太にかなうものではなかった。

その後、新潟の生活になじめなかったので、再び北海道に渡った。夫が北見津別でトラックの運転手をする事になり、炭鉱で使う坑木を運搬する仕事を始めた。しばらくしてから、主人と別れて、兄が砂川にいたので、そこで生活することとなった。

（くろぬま あきこ 大正13（1924）年 旧樺太・大泊郡長浜村生まれ）

長持（ながもち）

衣類や寝具の収納に使う長方形の木箱。